

京都部落問題 研究資料センター通信

第42号

発行日 2016年1月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告二〇一五年度部落史連続講座Ⅱ

当資料センター主催の「二〇一五年度部落史連続講座Ⅱ」を京都府部落解放センターで、一月一日、二〇日、二七日の三回にわたり開催しました。

各回の講演要旨は次の通りです。尚、詳しくは三月末に発行予定の講演録をご参照ください。

第1回

在日朝鮮人を描いた美術作品

—京都を中心に—

講師 水野直樹さん
(京都大学教授)

近代の日本人が朝鮮人をどのように見ていたのかを考えるうえで、映画や文学などいろいろな側面を考える事が出来るが美術もその重要な素材となる。

戦前の展覧会の図録を調査する中で、日本在住の朝鮮人を描いた作品がいくつもあることに気が付いた。朝鮮半島に行つて朝鮮人や朝鮮の事物を描いた絵画は多くあるが、男性画家がキーセンを描いた絵が目立つ。それは植民地支配民族の立場から被支配民族の女性を見る視線であり、オリエンタリズムということができる。

それらの作品と日本在住朝鮮人を描いた作品の違いを明らかにするために、八つの作品(新海竹太郎「全力」(彫刻)・三井萬里「暮るるトロ路」・秋野不矩「野を帰る」・梶原緋佐子「機織」・中田恭一「大阪築港」・湯上球「午後の日」・谷口富美恵「はらっぱ」・片岡球子「緑陰」)を取り上げ、作品の画像を見ながら、いつ、どこで何をみて創作したのか、について詳しく説明された。

これらの作品の多くにはチャ・チョゴリを着た女性が子守や砂利採取などの労働をする様子が描かれ、その生活を感じる事が出来る。またオリエンタリズムの影が薄く、対象に対する作者の共感が感じられる。これらの作品からは在日朝鮮人の歴史を垣間見ることができ、今後も研究を進めることで在日朝鮮人の歴史像を豊かにする可能性がある」とまとめられた。

第2回

京都における在日朝鮮人

—西陣地区を中心に—

講師 高野昭雄さん
(大阪天谷大学准教授)

西陣地区は、江戸時代から織物業が盛んな地域で、今出川大宮あたりを中心として一日千両の商いがあつたと言われ、「千両ヶ辻」とも呼ばれた地であつた。

大正から昭和初期にかけて織物の生産量が増えるに連れて西陣のエリアが広がり、労働者も不足するようになり日本各地から、また朝鮮から西陣に労働者が集まるようになった。特に日韓併合の時期頃から朝鮮からの労働者が増え、一九二〇年頃には朝鮮からやってきた人に住居や職場をあつせんする朝鮮人の組織「京都朝鮮人労働共済会」が西陣にできる。日本への朝鮮人流入の背景には植民地支配下での生活の苦しさがあり、日本の人口増加に伴う米不足を補うための「産米増殖計画」による朝鮮での食糧不足などがある。

西陣では朝鮮人労働者は主に下駄の鼻緒などに使うビロード織に従事していたという事である。尚、東九条に住んでいた朝鮮人は、土木や金属回収などに従事していた。西陣とは全く違う職業構成であつた。

戦争中は、統制経済の深まりの中で西陣織の生産が大きく減るが、戦後の復興期になるとビロード景

気がおこり西陣には多くの朝鮮人が新たに流入することになる。戦後の西陣織物は日本人ではなく朝鮮人によって本格的に再開されたとも語られるほどであった。

一九五〇年代、西陣の朝鮮人織物業者は柏野学区に比較的多く住んでおり、柏野小学校には帰国事業の記念碑が建てられている。

尚、隣接する被差別部落（楽只地区）には西陣織の仕事につく人はいなかった。それは不良住宅のため賃機織りができない、また、差別のため西陣に働きに行けなかったためではないかと分析された。

新聞記事や統計資料などを使って西陣織産業を支えた朝鮮人労働者について詳しく説明された。

第3回

在日朝鮮人女性の自主的救済事業と「内鮮融和」

—「親日派新女性」金朴春の思想と行動をめぐって—

講師 杉本弘幸さん
(京都工芸繊維大学非常勤講師)

一九二〇年代初頭、京都における朝鮮人は民族差別にさらされ、失業者も多く厳しい生活をしていった。一九一七年頃、キリスト者の

金朴春は夫と共に京都に來住し西陣織の工場で働いたが、厳しい差別に直面したことを契機にキリスト教女性青年会などの援助をうけながら講演活動を始める。「内鮮融和」を主張したため、在日朝鮮人たちからは憎悪される存在でもあったが、植民地支配を肯定しつつもその矛盾や朝鮮人差別を指摘し、「朝鮮人の救済を積極的に行つて内鮮融和を進めること」で日本も日本人も良くなる」という論理で朝鮮人女性の救済事業を進めようとした。

一九二二年一月に「朝鮮職業婦人共済会」を設立し、同志社公会堂で第一回大会を開催している。その後、大阪に活動の拠点を移して朝鮮人女性紡績労働者を対象とする「慰安会」や職業紹介、身上相談など活発な活動を行い新聞などでも大きく取り上げられたが、一九二二年七月、出産後の経過不良のため二八歳で死去する。

行政主導の内鮮融和事業が始まる前に、在日朝鮮人女性への救済事業を行った金朴春の思想と行動、また苦悩や葛藤について当時の新聞やキリスト教関係の史料を使いながら詳しく説明された。

一〇〇年前のモノグラフィ

—日雇労働者とオーラルヒストリー—

吉村智博
(大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員)

日雇労働者の生活誌をめぐる聞き取り作業が近年積極的におこなわれつつある。オーラルヒストリー

(口承史)を重視する能川泰治氏は、ご自身の近現代史研究のなかに意識的に聞き取りを採り入れている。

その成果は、「聞き取り記録・ある日雇労働者の戦中・戦後(上・下)」「『史敏』第八・九号(二〇一一年六月・十一月)」、「高度成長期以降の大阪・釜ヶ崎における高齢者の生存と共同性—紙芝居劇サークル「むすび」小史として」『歴史学研究』第九〇号(二〇一三年一月)、金沢大学日本史学研究室編『かたりべ』第五集(大阪・釜ヶ崎)(二〇一四年)などに結実している。また、原口剛・白波瀬達也・平川隆啓・稲田七海といった新進気鋭の研究者らが中心となった編集・執筆した『釜ヶ崎のススメ』(洛北出版(二〇一二年))のなかでも、「釜ヶ崎の日雇い労働者はどのよう

に働いているのか」として題して聞き取りに基づいた一章を纏めている。

私もかつて、港湾労働者として日本最大規模の寄せ場である大阪・釜ヶ崎で生活し続け、自らの人生を『無縁声—日本資本主義残酷史』藤原書店、一九九七年(新版二〇一〇年)として上梓した平井正治氏(故人)のお話を長時間にわたってお伺いし、デジタル映像で収録した経験がある(二〇〇五年)。自らの生い立ちから釜ヶ崎で生活するようになった経緯、全港湾労働者関西地本西成分会で活動したこと、身内が判らないまま無念の死を遂げた日雇労働仲間の子を産んだ証を何日もかけて追跡し親類縁者に辿り着いたこと、荷揚げなどに際して海運会社別に相違する荷掛けの方法や手鉤てがぎの特性を熟知しているのは社員ではなくむしろ日雇労働者であったこと、にもかかわらず日雇労働者を蔑視する言動が頻発することに対して抗議・叱責したこと

などなど、ときに柔和な笑顔で、ときに険しい表情を交えながら、微に入り細を穿ちつつ語ってくださった姿が今でも鮮明に思い出される。文字資料だけでは決して推し量りきれない日雇労働者の日常的営為、あるいは寄せ場の情景、労働の過酷さと誇りなどはオーラルヒストリーによって鮮やかに甦るものであることを、この時ほど痛感したことはなかった。

◇ 日本近代史上、日雇労働について、木賃宿（簡易宿）の集中する寄せ場などでの個人的な思想状況を個別かつ詳細に探るのはかなり難題であるが、わずかながら手がかりも遺されている。かつて大阪市内に市立として設置されていた共同宿泊所のうち三カ所（いずれも、米騒動後の一九一九年開設の今宮、鶴町、西野田で、食堂、理髪所、人事相談所、乳児院を併設）での聞き取りを元にしたモノグラフ（原文は「モノグラフィ」）がそれである。大都市化の過程で生起する種々の社会問題を解決する専門セクターとして一九二〇（大正九）年四月に大阪市「部制」のもとに誕生した社会部がおこなった初期の調査・報告にあたる『「大阪市立の共同

宿泊所に宿泊せる」労働者の生活（モノグラフィ）』社会部報告 No.11（一九二二年）は、今からおよそ一〇〇年前のものだが、往時の日雇労働者の生活が生き生きと再現される（原資料は、大阪市立中央図書館などで所蔵、復刻版もあり）。

この記録は、総数九二人からの聞き取りの記録で、そのうち、自らの職種を人夫、仲仕^{なかし}、手伝、雑役、土工あるいは鮫鱈^{あじかじ}（立って仕事を採す姿を魚のアンコウに模した用語）と自称しているのは、全体のおよそ半数に相当する四四人である。大阪市内の労働下宿（私設の有料職業紹介所と下宿屋を兼ねたもので、一日あたりの賃金の一〇〜一五%程度を徴収する仕組み）などを經由して寄せ場などに流入した日雇労働者のケースなども記録されており、彼らの日常生活スタイル（趣味や嗜好品）と労働内容、さらに労働運動に対する認識および意識などが詳細に判る。宿泊所といっても夜間の宿泊だけを保障する更生的な性格の強い施設であったが、さきの四四人のなかで労働運動について明言している人のうち、さらにその半数の二三人の当該部分の発言を抜粋して一覧表に纏めてみた。出身地などもある程度記されてお

り、朝鮮人も二人含まれている。たとえば、上から三番目の二五歳・石川県出身という「鮫鱈」の男性が、自身の労働内容と賃金（原文では「賃銀」）について、次のように語っている。

俗に鮫鱈と云ふ築港の沖仲仕です。鮫鱈の賃銀は如何にして支払はるゝかの問題ですか。先づ天気の良い船の出入りする日に何時でも労働仲買人の来る辺をうろうろうろついで居ると仲買人がよい仕事があつたから来いと云ふて私共を引き立てます。

我々は之に附いて行きます。すると仲買人等が既に請負済の仕事につき船の方から仕払はる可き賃銀の半額を我々に支払ふ予算で我々を勤務に着かせるのです。仕事がつんで仲買人が船から報酬を受け取つた上は予算通り半分を懐に入れ其他を標準賃銀を参照しながら各人の働きに依じて分配します。多い少ないを云ふ事はなりません。云つてもよいけれど云へば撲られるだけです。私共が仲買をする様な事は出来ません。之には多少の資本も必要ですし、又彼等の間には不文の法理があつて断りな

しに其様な仕事を始めると仲間からひどくいぢめられます。それでは賃銀は仲買人の一方的意志によつて決定せられ我々は無条件で之に服従して居るのかと云ふとそれはそうですが、仲買人間にも競争がありますし、一回悪い事をした仲買人には誰もゆく者が無くなつて自分で自分の身を亡ぼす事になりますから自然相当な賃銀は払ひます。

「仲買人」（いわゆる「手配師」）が仲介する日雇労働市場への供給構造が明瞭に語られているが、「ピンハネ（頭刎^{びんは}ね）」（搾取）と表裏一体の「労働者の確保」への強かな抵抗（不服従）の問題も同時に指摘されている。決して片務的ではない日雇労働者の微妙な立ち位置をも雄弁に物語っていて、きわめて興味深い。さらに彼は、一覧表にも記したとおり、労働運動についても「現代の社会に対しては不平が沢山ありますが一々申しあげる事も出来ません。此間友人が東京に行つて大衆運動と云う週刊新聞を出して初刊が昨日送つて来ました。私も今仲仕の労働組合を作つて週刊新聞でも出さうと計画中の処です。定款の作成等につ

1920年代初頭の大阪における日雇労働者の労働運動に関する認識および意識(抜粋)	職種・年齢(出身地)
手伝・33歳(東京市深川区)	
「権力者に対しては別に憎くも可愛くありません。…労働運動のみは大いに違って同階級が十分に暮らせる洋願ふて止まない次第です。労働運動には関係した事も目撃した事ありません。」	
手伝・23歳(東京市芝区新網町)	
「社会はよくも悪くもありません。労働運動も同じようなものです。何処の労働組合にも属しません。姉さんと伯母さんとが有難いと思ふて居ります。」	
鮫鱈・25歳(石川県)	
「現代の社会に対しては不平が沢山ありますが一々申しあげる事も出来ません。此間友人が東京に行つて大衆運動と云う週刊新聞を出して初刊が昨日送つて来ました。私も今仲仕の労働組合を作つて週刊新聞でも出さうと計画中の処です。定款の作成等につき分からぬ点もあり困つてゐます。此頃暇のある時には名士を訪問して意見を聞いてゐます。」	
仲仕・24歳(徳島)	
「世の中の事は何も考へた事はありません。労働運動其辺何とでもして置いて貰へませんか。」	
鮫鱈・30歳(東京市深川区)	
「社会的には不平も何もありません。其日其日のパンにありつく事を考へるのみです。一時屋外労働誠友会と云ふ労働組合の徽章を貰ふた事があります。社会に対する意見や何かは此通りに落ちぶれて居る次第ですから其辺宜しくご容赦下さい。」	
仲仕・21歳(朝鮮半島慶尚南道東来郡左耳面)	
「内地人に対する感想ですか。一言にして之を言へば憎くてなりません。…労働運動には内地人鮮人の区別なく賛成です。労働争議に関係したことはありません。」	
手伝・33歳(熊本県天草郡)	
「現在、学者達労働者煽動家達の想像も及ばない様な事を毎日見聞きして居ります。…労働運動とか社会問題とか云ふ事は非常に嫌ひで意見も見解も何もありません。」	
手伝・32歳(山口県豊浦郡)	
「社会観としては大いに働く可しと云ふにあります。」	
仲仕・31歳(神戸市)	
「世の中に対する考等は何もありません。労働問題等に対しても何等考を巡らした事ありません。」	
仲仕・34歳(朝鮮半島慶尚南道金海鳴旨面)	
「朝鮮独立もよいが私共は働いて喰べて寝てそれに金でも儲かれれば何も要りません。」	
土工・27歳(熊本県菊池郡)	
「労働者をもつと優遇する様な社会にならねばと思ひます。…労働運動等については未だ深く研究してゐません。」	
仲仕・28歳(長野県南安曇郡)	
「資本家が金があると云ふてあまり贅沢するのはよくありません。資本家と労働者とお互い助け合はねばいけませんね。」	
手伝・32歳(新潟県三島郡)	
「労働運動には何等興味を持つ事が出来ません。今の世の中に通用せぬ事をしたとて何にもなしません。」	
手伝・33歳(滋賀県神崎郡)	
「労働運動等は何も味つた事ありません。」	
手伝・45歳(兵庫県明石町)	
「労働運動等には何も興味はありません。」	
手伝・43歳(松山市)	
「労働運動等大分宜しい様ですね。何の団体にも属しません。」	
手伝・39歳(三重県北牟婁郡)	
「社会運動も労働運動もありません。只、身の不遇を憾むのみです。」	
手伝・26歳(徳島)	
「労働運動と聞けば労働者は非勝てばよいと思ふて案じてゐます。」	
手伝・37歳(神奈川県保ヶ谷町)	
「自分のやり方が正しくないで、此様な生活をして居ると云ふ事を認めて居ます。労働運動とか云ふような事は大嫌ひです。」	
鮫鱈・47歳(愛知県碧海郡)	
「いゝえ、とても資本家と喧嘩出来る様な力等はありません。」	
手伝・29歳(和歌山県伊都郡)	
「労働組合等云ふ事は考へた事も何もありません。」	
手伝・43歳(奈良県高市郡)	
「労働運動等については何も考へた事ありません。手伝業者は、労働運動等に関係する者は一人もありません。」	
手伝・30歳(岡山県若田郡)	
「労働運動等は全く価値の無いものだと思ひます。」	

き分からぬ点もあり困つてみます。此頃暇のある時には名士を訪問して意見を聞いてみます」と、かなり積極的にコミットメントする姿勢を明言している。

一方、大方の労働運動に対する認識は低く、共同宿泊所という市営の公共空間（更生施設）で起居していることもあつてか、一覽表で上から五番目の「鮫鱈」を自称する男性のように、「社会的には不平も何もありません。其日其日のパンにありつく事を考へるのみです。一時屋外労働誠友会と云ふ労働組合の徽章を貰ふた事があります。社会に対する意見や何かは此通りに落ちぶれて居る次第ですから其辺宜しく「容赦下さい」といった見解が多数を占めている。

彼らこそは、「労働力」の処理・再生産を規制する諸個人（人格的承認を相互にうけつつ結合している個人）の関係Ⅱ「同職集団」から排除され、堆積した「窮民型」労働力に他ならず（東條由紀彦『近代・労働・市民社会―近代日本の歴史認識Ⅰ』ミネルヴァ書房、二〇〇五年）、「彼等の中には相当の経歴を持つてゐる者や、高等の教育を受けた者も少ないが、半年一年を経つといつし鮫鱈型に退化して」^{しま}うと揶揄

される存在でさえあつた（村島婦之「あるアンコウの手記」『社会事業研究』Vol.15―11、一九二七年）。労働と寝食を可能とする日常の居場所はかろうじて確保していたが、自己的人生に諦観をともなつた利他的な思考をいだく傾向にあつたといえよう。

◇

しかし、彼らは、総力戦体制の構築とともに、町内会（全戸加入原則）を通じて、「銃後」を形成していくことになる。全国紙は「さあ俺らも更生だ！／釜ヶ崎に描く力強い表情」と見出しで、寄せ場の日雇労働者の日常について、「スラムも新体制だ！いまその更生の表情を拾つてみると―働かぬもの食うな！」という今宮署釜ヶ崎出張所著主任金沢巡查部長の教えに従つて、西成区東西入船町六、〇〇〇人の勤労階級が起ち上がった、飲酒、賭博、喧嘩の巷といわれた釜ヶ崎がその面貌を改めて簡易宿止宿人たちが時局を認識し、進んで入会した両町会は円満に銃後の勤めに励み：またルンペン君の埒今宮保護所では一二〇名の止宿人たちが毎夜食後、食堂を図書館にして各方面からの寄贈図書、新聞などを争つて耽読、灯火に親しみ勉強

に努めている」と伝えてくる（『大阪朝日新聞』一九四〇年九月一七日付）。

釜ヶ崎に密着する警察の主導によつて日雇労働者の生活全般が規律のもとに統制されている様子が具に報じられており、総力戦と寄せ場との関連は、日雇労働者の日常生活の細部にまで浸透して進行していたことが判る。そしてそのことを端的に象徴するのが、「奉仕団」などの自主的組織である。国家総動員法発令直後に結成された西成労働至誠団結成一、六〇〇人の賛同があり、「聖戦が長びくから俺らもその覚悟が必要だ、この際おれら仲間でも銃後の援護団体をつくつて勤労報国をしよう」と結束を呼びかけた（「続々結成される自由労働者の奉仕団」『社会事業研究』Vol.26―4、一九三八年）。こうした素地をもつて大日本労働報国会が創立されるが、同会は「綱領」の一つに「我等ハ皇国産業ノ使命ヲ体シ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ愈々固クシ皇猷を恢弘センコトヲ期ス」と謳ひ、挙国一致への意識を高揚させる役割を目指していた（『大日本労働報国会要覧』一九四三年）。

◇

それから七〇年あまり。奇しく

も現在、大阪・釜ヶ崎では、「あいりん総合福祉センター」（あいりん労働公共職業安定所、西成労働福祉センター、教軒の店舗が入居、大阪社会医療センター付属病院、大阪市営萩之茶屋住宅が接合し一体化）の建て替え問題、廃校となつた小学校跡地の再利用などの諸問題を核とした労働、住宅、福祉、医療、教育をめぐる地域再編の議論が、「仮称萩之茶屋まちづくり拡大会議」（二〇〇八年設立）を舞台にして、多くの人々と行政（大阪府・大阪市・西成区および国）の間で成熟しつつある。もとより、最も問題解決に主体的に取り組むべきは、寄せ場を労働政策的に創出してきた国や地方自治体であることは論を待たないのだが、日雇労働者の日常生活と労働・福祉・医療など深刻な問題については、多くの支援者・関係者の期待を余所に、とかく後回しにされがちなのも事実である。

今、聞き取つておかねばならないことがないか。音声や映像による生の証言こそが後世に重要な道しるべをもたらすことになるのであるから。そんなことを静かに教えてくれるのが、一〇〇年前の貴重なモノグラフなのである。

『土蜘蛛』劇評せむぎ

渡辺 毅
(穀雨企画室)

千鳥格子の紗すずめが、よじれたり開いたりしながら、川の上をあっちへ行きこっちへ行きしている。と、そんなふうに見えなくもないゆりかもめの群れに冬の訪れを感じながら、四条大橋を渡って南座へ。師走の顔見世興行が会期半ばに差しかかったころである。

昼の部は十時半には始まって、三階席に窮屈な体を押し込んだのは正午をとうに過ぎた時分。扇雀の「碁盤太平記」、橋之助と藤十郎の艶やかな「吉野山」、一つめ二つめの芝居は観もしなかったが、構うことはない、私は四つめだけが観たかった。近ごろ私の気がかりは土蜘蛛。顔見世の舞台の昼の部四つめに現れ出るというから、いっその目で確かめたくなったのである。

北野天満宮参道脇の東向観音寺。その境内の片隅に、粗末な雨除けだけ施された「土蜘蛛灯籠」なる遺物が置かれている。

私は、西陣の街歩き案内人を務めることがしばしばあって、その途中、よくこの寺に立ち寄って

は人々を土蜘蛛灯籠の前へ連れて行き、こんな話をする。

「この灯籠は、もとはと云えば寺の南東数百メートル、七本松通一条の清和院門前に土蜘蛛塚と呼ばれる遺跡があつて、そこで掘り出されたただの石積み。伝承では平安京の昔、土蜘蛛と呼ばれた者が、名にし負う四天王を従えた源頼光に殲滅させられた、その場所が土蜘蛛塚。明治に入って調べたところ、たいした出物はなく、この石積みが見つかったとか。かたちが灯籠に見えなくもないので近所の商家がもらい受けて庭に据えると、家運にわかに傾き、土蜘蛛の祟りではあるまいかと噂が立ち、灯籠はたらい回しにされた挙句、明治末だか大正初年だかに観音寺に引き取られたというのです」

ほお、などと感心して聴いてくれる人々を前に、なおも私は言葉を継いで、

「土蜘蛛は、穴倉に暮らす手脚の長い異形の者」というが、さてどうだか。要するに朝廷からみて『まつろわぬ民』だったようで。屈従せぬ者どもを攻め滅ぼし、あ

いつらは人間以下の化け物、だから討伐したのだと、己れの非道な行為を正当化する。そうしたことは古今東西、征服者の側が嫌というほど繰り返してきたやり方です。例えば：」

「昔、スペインがアメリカ大陸に乗り込んでいった時、インディオの人たちを虫けら同然に殺したつていうが、あれなんぞも一種の土蜘蛛狩りだわな」

「前の戦争の時、日本軍が大陸で、現地の人たちにずいぶんなことをした。匪賊狩りだとか。あれもやつてる側としちや土蜘蛛退治みたいな気分だったのかもわからんな」

聴衆の中にはそんなふうな口を挟んでくれる人もいる。「おっしゃる通りです。平安京の土蜘蛛もおそらくは、朝廷が移ってくる以前からそこにいた先住民だったので。そりゃあ迫害に耐えかねて一度や二度のテロ行為はやらしたかもしれないが、そうでなくても平安京の支配者たちには目障りな存在。だから掃討した。手を下したのは頼光ならびに四天王、ということにしておけば、非道な行為も英雄譚にいつしかすり替わるわけだ」

「ところであなた」と云い出す人があつたのは、思えば秋の或る日のことである。

『古事記』や『日本書紀』でも、

土蜘蛛は散々な目に遭つてるのではなかつたかな？」

「おっしゃる通り。『古事記』では、かの有名な『撃ちてしままん』の掛け声とともになぶり殺しにされていきます。『日本書紀』にも内容こそ違え、東征の途上で神武天皇が土蜘蛛を討伐したことが記されています」

「神武っていうと、つまりあいつだ。カムヤマトイワレビコ…」

思わず声の出どころに目をやれば、やけに背の高い、八頭身ほどに脚の長い初老の男が黒ずくめの身なりで立っている。おや、こんな人、さっきまで聴衆の中にいたろうか。

「いや失敬。どうぞ先を続けて」とこの男に促された。「カムヤマト…そんなことまでよく存じて。いや何、もうそれほど話すこともありませんが…」

「いやいや、どうぞ続けて」

「それでは…。記紀の土蜘蛛退治も、神武つまりカムヤマトにながしが実際に手を下したかは分からぬし、カムヤマトは実在したのかさえ疑わしい。とはいえ、大和朝廷成立の過程で強いリーダーが現れ、先住民を次々に制圧したというのにはあり得る話。そうしてやつけた人々を、征服者たちは『土蜘蛛』と名づけたわけです。津田左右吉博士も、土蜘蛛とは特定の種族の固有名詞ではなく天皇勢力

に従わなかった土着先住民に総じて付けられた一種の蔑称だと云っています。その証拠に土蜘蛛なるもの、他にも神代古代の歴史のあちこちに顔を出し、顔を出しては滅ぼされている。むろん、カムヤマトイワレビコに退治された土蜘蛛と、頼光に殺された土蜘蛛も、血統的なつながりがあるわけではなく……」

「そうですか。私は、つながっているとはかり思っていましたよ」と、話を遮ったのは、例の黒ずくめ。

「カムヤマトイワレビコに敗れた土蜘蛛は葛城山の土の中に閉じ込められたんです」

その話は知っている。大和葛城の一言主神社には、神武天皇が馬鹿力を發揮して土蜘蛛を土中に封じ込めたと伝わる巨石がある。ついでに云うなら、神武の土蜘蛛討伐を称える石碑が、皇紀二千六百年に建てられて、葛城の山ふところ、雑木林の中に今もある。

「そうして閉じ込められた土蜘蛛の末裔が幾世を経て、カムヤマトイワレビコの子孫である天皇家への怨みを抱いて平安京に出現したんだと、私はつきりそう思っていましたよ」

「ええまあ、そうでない、とは一概には云えないでしょうけれども……と私。」

「ところであなたに改めてうかが

いたいのだが……」と、ふいに黒ずくめが身を乗り出す。

「何でしょう？」

「あなたは要するに、それをけしからんことだとおっしゃりたいのですか？」

「何を？」

「つまり、カムヤマトイワレビコや源頼光が土蜘蛛を退治したのは、今風に云うなら民族的マイノリティに對する弾圧、これはけしからんとおっしゃりたいのですか？」

「まあ、おおよそそんなところで」

「なるほど。それは結構。がしかし、それはあなた、自分を棚に上げてきれいごとを云ってることになりはしませんか？」

「棚に上げて、とは？」

「だって、あなたは他でもない、そのけしからんことをした人の末裔でしょう？」

気づけば、取り巻きの聴衆はすっかり姿をくらまして、目の前には黒ずくめの男だけである。ああ、これは夢をみているんだな。そう思った途端、男が組んでいた腕を両脇に下げた。袖がだらりと膝まで垂れて、まるで男は、手脚の異様に長い土蜘蛛のよう。

「つまりあなたが云いたいのは、私が渡辺姓だから……渡辺綱の末裔だ」と

「そうですよ」

渡辺綱は、坂田金時、碓井貞光、

ト部季武と並ぶ頼光四天王の一人。その綱という強者がご先祖様だと、幼い時分、確かに私は聴かされて、誇らしくさえ思ったものである。本当か嘘かは分からない。だが仮に先祖が綱とした場合、なるほど私は、土蜘蛛というマイノリティを弾圧し誅殺したその張本人の末裔、ということにはなる。

先祖の加害者責任を棚に上げて私がきれいごとを云っている、この黒ずくめは誹謗したいのか。困ったな。いくら何でもその責任を引き継ぐにしては、綱というご先祖様の存在は私には疎遠に過ぎる。そんなこっちの当惑を見透かしたかのように、

「先祖のやらかしたことの責任を引き受けろというのは酷な話かもしれませんな。それよりは『未来志向』でいくのが、今の時代はいいかもしれませんな」

この黒ずくめ、嫌なことを云う奴だ。

「だが申し上げておきたいのは、加害者側はしでかした悪さを忘れても、ひどい目に遭った側はなかなかどうして幾世代を経ても被った仕打ちを忘れない。だからカムヤマトの代から千有余年を経て平安京に出現し、それからまた千有余年、今またこうして……」

「土蜘蛛灯籠の前に現れた、と？」

「いやいやこれは、たかがあなたお一人の夢の中の出来事。実際に

現れ出るのは、芝居小屋の板の上。この冬は南座顔見世興行に現れることとなつております」

「なんと、顔見世の……」

「なあに、あなたのご先祖様はじめ剛の者どもが束になつてかかって、そう易々と殺されはせぬ。何せこちらは、忘れがたき怨みつらみを、向後また幾世代にもわたつて継いでゆかねばならぬ身でございますからな」

ハッハッハ、と哄笑する黒ずくめに、おのれ、貴様は土蜘蛛、と、にわかには渡辺綱が憑依したごとく、私は身構えて腰に手をやる。だが、長脇差を佩いているはずもなく、しようことなしに抜刀のふりだけの徒手を振りかざせば、黒ずくめは飛びすさり、「それ見たことか、綱の末裔！」、吐き捨てた刹那には姿かたちも消え失せて、柵を挟んだ遠目に土蜘蛛灯籠がぼつねんとあるばかり。

さて。師走の南座、窮屈な三階席に体をねじ込んだのは幕間の休憩時間。やがて開演のブザーが鳴って始まったのは、四つめの『土蜘蛛』に先立つ、三つめの『河庄』である。

治兵衛と恋仲の遊女小春の許へ、夫と別れてくれると請い願う、治兵衛の妻からの手紙が届く。恋人との訣別を心に誓った小春がなくなり、急な心変わりど勘

練った治兵衛は小春を責める。そこを間に立ってなだめすかし、悲恋の苦しさを解った上で、世間の道理を重んじて二人の仲を終わらせようとするのが治兵衛の兄、梅玉扮する孫右衛門。兄に諭され、うじうじしながらも小春との別れを納得する治兵衛。このうじうじを、上方歌舞伎の大名跡を継いだばかりの四代目鴈治郎が未練たっぷり、思わせぶりたつぷりに演じて、「よっ、成駒家」ときた。だが私には、鴈治郎の熱演もさりながら、人情の機微を大仰ぶらずさりげなく演じた梅玉の芝居のほうが、よほど心に沁みただであった。こうして『河庄』が終わり、短めの幕間が過ぎれば、次はいよいよ『土蜘蛛』である。

『土蜘蛛』は、二代目河竹新七が引退して黙阿弥を名乗る直前の明治十四年、五代目菊五郎に書いた芝居。能の『土蜘蛛』に材を得た松羽目物、ということはいつまでも、羽目板に松を描いた能舞台をそのまま歌舞伎に移した仕立てで、『勧進帳』などがこの松羽目物の代表作である。黙阿弥は、『勧進帳』がお家芸の九代目團十郎と反りが合わなかったとかで、菊五郎に、『勧進帳』の向こうを張れる松羽目物を、引退前の置き土産よろしく書いて進めた、という一面もあったらしい。

能では『土蜘蛛』と云い、歌舞伎では『土蜘蛛』と蜘蛛の字を抜いて同じ「つちぐも」と読ませる。初演は好評、以降「新古演劇」の一つに数えられるようにもなり、明治二十年の史上初の天覧歌舞伎でも、皇后臨席の二日目の演目に加えられたとか。

芝居が始まって、最初に登場したのは左團次扮する平井保昌。歴史上では和泉式部の夫として知られるこの男、冒頭いきなり「源家の独武者」と名乗り上げ、四天王ではないがこれに匹敵する源頼光配下の強者である。その保昌が「我が君にはこのほどより御不例によって引き籠らせたまい」と主君の病を述べ立てたところへ、頼光その人がおごそかに現れた。演じるは：なんと梅玉。僅かな幕間を挟んでの再登場。しかも今度は「げに百病の長という風邪にこの身を犯されて、月を重ねて煩いし」といった調子、まことに大仰人間の芝居というよりも、頼光とこの名のサイボーグがそこにいるかのようである。

保昌が引き下がりが、代わって薬を届けに来た侍女胡蝶が、都名所の数え歌で一さし舞って退場。頼光、ようよう気分も晴れてきたその矢先、「瘧病の熱にわかに発し、胸苦しく覚ゆるは、病と云えど常ならず、げに物の怪の祟りかと」と呻吟したところへ、長身黒ずく

めの僧が、花道から不気味に肅々と姿を見せた。「よっ、松嶋屋」。演ずるは十五代目仁左衛門、僧智籌じつは土蜘蛛の精。

智籌は、頼光の御病平癒を祈禱するべく叡山から来たと告げる。半信半疑の頼光が仕掛ける仏道問答。「して大威徳明王は？」「尊容三面六臂にして悪龍毒蛇を摧伏す」「して金剛夜叉明王は？」「尊容同じく三面六臂、左の御手に輪宝を捧げ、右の手に矢を持ちたり」。『勧進帳』の弁慶富樫のそれを髣髴とさせるこの問答、もとなつた能の台本にはなく、黙阿弥の創作である。能では、僧は頼光の前に現れるなり不吉な言葉投げかけ、あつという間に土蜘蛛の正体を現す。要するにただの化け物。だが黙阿弥の創意は土蜘蛛に知性を与えた。難解な仏道問答に澁みなく応ずるのが、ただの化け物であるはずがない。しかも今、化け物が憑依しているのは誰あろう、知性を備えた名優仁左衛門。ちなみに「智籌」の名も黙阿弥の工夫で、蜘蛛の音読「チチュウ」に引つ掛けたとか。

問答の末、智籌を尊僧と信じかけた頼光であったが、従者の注進で正体を見破り、名刀膝丸を抜いて斬りかかる。智籌は土蜘蛛の本性を現して糸を吐き、つまりは掌中の糸玉を投げて蜘蛛の巣を放射し、頼光が搦まっている隙に退散

する。保昌再登場。頼光から変事の次第を聴かされ、主君の病は土蜘蛛の祟りと得心する。そして、土蜘蛛の血の滴りの跡を辿って居処を突き止め、四天王と力を合わせて奴を退治してくれようと宣言。頼光頷き、「疾く疾く蜘蛛を退治候え」と云って保昌を送り出す。

ここまでが二場あるうちの第一場。頼光の出番はここまで。頼光自身は土蜘蛛退治に赴かず、梅玉もここで御役御免。人情の機微を演ずる孫右衛門に較べれば、科白は多くてもサイボーグのようであればいい頼光は、さほど労を要さぬ役柄であったと推察。改めて述べるまでもなく、頼光は能で云う「ツレ」即ちほんの脇役。「シテ」即ち主役はあくまで土蜘蛛、というのがこの芝居である。

しばしの幕間狂言があつて第二場へ。幕間狂言では今をときめく愛之助、橋之助、扇雀の三人が、番卒に扮してコミカルな踊りを披露した。話の本筋とは無関係。

第二場は、土蜘蛛のアジトと思しき構造物が舞台中央に据え置かれた。保昌ならびに四天王、花道から威風堂々の登場である。

「血汐の大路に滴りしを、松明の光に尋ねれば、ここは東寺の裏手に候」とは保昌の、場面説明の口上。おや、と私は訝しむ。土蜘蛛の居処は清和院門前、七本松通一

糸あたりだったはず。東寺の裏手とは、これ如何に。

能の台本は場所を特定していない。江戸前期刊行『前太平記』は、ほぼ同様の土蜘蛛退治の逸話を記し、「流れたる血を追ふて行く程に、北野の社の後ろに大きな塚ありて、其にて血の跡止まりけり」としている。清和院門前が北野の社の「後ろ」とはやや違和感があるが、土蜘蛛灯籠の伝承と概ね重なり合う。「東寺の裏手」は、黙阿弥の改変か。

保昌と四天王は花道から舞台へ、兵卒を引き連れて歩を進めた。いったいどれが我が祖先様かと思つ間もなく、派手な金襴を纏つた保昌の名乗りが続いて、紫の唐織衣裳の武者が朗々と「我は渡辺源次綱」。以下赤の金時、緑の貞光、青の季武と、色違いの四天王が順々に名乗りを上げる。

五人の武者および兵卒たち、さあ、とばかりに土蜘蛛のアジトを崩しにかかれれば、やがて覆いを剥ぎ取られたアジト、蜘蛛の巣を張り渡した骨組が露わになり、中から土蜘蛛が出現する。智籌の黒ずくめからは一変したその風体、見たまを描写する筆力がおぼつかないゆえ、ここは黙阿弥のト書きをそのまま写すならば「黒頭唐織、色なしの着附、錦の法被、紺地金模様の手切、錦の打杖を持ち出できつと見得」、とこうなる。

「何者なるぞ」と詰め寄せられた土蜘蛛、名乗りを上げたその言葉：「我を知らずやその昔、葛城山に年経りし土蜘蛛の精魂なり！」

やっぱりそうか。仁左衛門に憑依して見得を切っているこいつは、カムヤマトイワレピコの手で葛城山中に封じ込められ、幾世経て再臨した、まさにあの土蜘蛛なのである。

『日本書紀』卷三「神日本磐余彦天皇」の項に曰く、「高尾張呂に土蜘蛛有り。其の為人、身短くして手足長し。侏儒と相類たり。皇軍、葛の網を結きて、掩襲ひ殺しつ。因りて改めて其の邑を号けて葛城と曰ふ」

舞台では大立ち回りが始まった。保昌、四天王、軍卒どもが次々に討ちかかるが、仁王立ちの土蜘蛛は順々に、躲しては突きつけ、突きのけては躲し、少しもたじろぐ様子はない。しかも「繰り溜めし千筋の糸を右左、投げ掛け投げ掛け白糸の、手足に纏わり五体を包めば、さすがの保昌四天王らも、自由に動くこと叶わず」。もはや大立ち回りは様式美追求の世界と化して、化け物退治の修羅場というよりは華麗なレヴュー。我が祖先様渡辺綱も、まるで脇を固めるダンサー。

黙阿弥の書いた本では、それでも武者らは苦心の末に土蜘蛛を討ち取るようになっていく。「…神

国土地の恵みを頼み、彼の土蜘蛛中に取込め、大勢乱れ掛りければ、妖魔の術も消え失せて、劍の光りを恐るるを、得たりや得たりと附入り附入り、難なく蜘蛛を討取りて：」。土蜘蛛は、ト書きでは「尻ギバに」へたり込むとある。尻ギバとは、脚を前に投げ出し尻から落ちる動作のこと。つまりは土蜘蛛が恰好悪く負けるのが、黙阿弥の考えたオチであったはず。ところが：

大立ち回りのレビューはいよいよクライマックス、とその時、土蜘蛛を真ん中にして武者たちが横一列に並んだのである。そして土蜘蛛が最後の糸を両掌から仰々しく放射するや、土蜘蛛、保昌、四天王が、一味同心のように打ち揃つての大見得。なんとこれが結末で、土蜘蛛は退治されることのないまま、歌舞伎『土蜘蛛』は幕を閉じたのであった。

これはいったいどうしたことか。昼の部が終わわり、人波に揉まれながらおもてへ吐き出されると、冬の日ははや昏れかけて、そこに例の黒ずくめが待ち構えていた。

仁左の智籌に似て非なるその男、長身を折り曲げ、微笑みかけて云うには、「どうでした？ あなたのご先祖のご活躍は？」
「うちのご先祖なんぞ端役でどうつてことありませんが、それよりあ

なた、いや土蜘蛛は退治されるどころか堂々のシテ役ぶり、最後は四天王を従えて大見得を切りましたよ。あれはいったいどうしたことですかね？」

「ううむ：」と黒ずくめもさすがに顔を曇らせて、「そこが困ったところだね」

「露骨に嫌われたり迫害されたりしてらうちは、こつちにも怨み甲斐つてものがあつたんですが、ああ中途半端におだてられると、誤魔化されているようで、生殺しにされてるみたいで、このへんがむず痒くてね：」

と、長く垂れた手の先を持ち上げて、腹の髷あたりを掻いてみせる。

「でしような。その上まさかうちのご先祖様と仲良く見得を切ることはないとは。戸惑われて当然です」

「まったくです。どうです、仲良く見得を切った敵の末裔同士、そのへんで一杯：」

というわけで、私と黒ずくめ、仲良く連れ立って、団栗橋のためのおでん屋へ。

調査結果の比較をとおして 棚田洋平／地域における相談員・相談者ヒアリング調査の概要 棚田洋平／被差別部落における相談・支援の現状と課題—相談員（支援者）ヒアリング調査から—熊本理抄／女性が抱える課題を「ケア」の視点から考える 熊本理抄／障害と生活困窮—聞き取り調査から見えてきたこと 谷川雅彦／若年者の生活困窮の実態とその支援のあり方—さまざまな課題を抱える相談者ヒアリング調査の結果より— 棚田洋平／生活困窮者と居場所 寺川政司／大阪府における総合相談事業・隣保館事業等の現状と課題 福原宏幸／生活困窮者自立支援法と地域における相談事業のあり方 五石敬路／本特集のまとめと今後の検討課題 福原宏幸
中世から継続する偏見と新たな恐怖感—マリアちゃん事件と「脅威」としてのロマ移住者— 金子マーティン

部落解放研究くまもと 70（熊本県部落解放研究会刊，2015. 10）

特集 ルポ・くまもとの被差別部落

ルポ・くまもとの被差別部落 荒牧邦三／『ルポ・くまもとの被差別部落』（荒牧邦三）へ寄せて～繋がること～ 入江彰信

史料紹介 合志郡鉢開関係検地帳 阿南重幸，山本尚友

部落解放ひろしま 98（部落解放同盟広島県連合会刊，2016. 1）：1,000円

特集 障害者差別解消法施行を前にして 「障害者差別の現実と課題を考える」

解放運動の人間像 38 浄土真宗本願寺派の差別体質について 小森龍邦

部落問題研究 214（部落問題研究所刊，2015. 10）：1,058円

特集 貧困の世代連鎖の実態と支援・克服の課題—沖縄県都市部における事例を通して—

歴史編 荻原園子／実態編 黒川奈緒／実践編 池田さおり

教育委員会制度改革の概要・問題点・課題 三上昭彦

史料紹介 近世隠岐島流人の科口書 上 松尾寿

ライブラリー・リソース・ガイド 13号（アカデミック・リソース・ガイド刊，2015. 12）：2,500円

私設雑誌アーカイブ「大宅文庫」の危機 ツカダマスヒロ

リベラシオン 160（福岡県人権研究所刊，2015. 11）：

1,000円

特集 第34回九州地区部落解放史研究集会

都城「K家文書」から見える被差別部落の人々の暮らし 仮屋睦男／自治正義団は糾弾闘争なんか、やっていたのかね？～第34回九州地区部落解放史研究集会に参加して～ 西田静／アジア・太平洋戦争期の全国水平社 朝治武

図書紹介 内田龍史編著『部落問題と向きあう若者たち』 大西祥恵

広瀬淡窓の人権思想と咸宜園教育 山田明

明治20年の斃牛馬引受会社設立について 関儀久

父ありてこそ—ハンセン病の父を語る— 2 林力

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 23 レメリンの解剖書と原三信の写本 石瀧豊美

映画紹介 『あん』 吉田到

ルシファー 18（水平社博物館刊，2015. 10）：500円
報告

2014年度第1回公開講座 「全国水平社の多様性を考える」

朝治武さん／第2回公開講座 「セクシュアルマイノリティの人権」 日高庸晴さん

特別報告 アジア太平洋地域ユネスコ記憶遺産に「水平社と衡平社 国境を越えた被差別民衆連帯の記録」を申請 守安敏司

和歌山研究所通信 50（和歌山人権研究所刊，2015. 10）

全国水平社創立宣言の世界記憶遺産を実現しよう!!! 朝治武

高野山の石塔に見る平等と夫婦愛 木下浩良

和歌山人権研究所紀要 6（和歌山人権研究所刊，2015. 8）：1,000円

魅惑的に錯乱させる部落民アイデンティティ—『差別とアイデンティティ』の書評に触発されて— 朝治武

雪踏直しでの揉め事—和歌山城下の場合— 水本正人

近世高野山の女人禁制について 矢野治世美

ひょうご部落解放 158 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2015. 9. 25) 700円

特集 戦後70年 戦争をどう語りつづのか

大学生座談会 映画『野火』を観る／中国残留日本人孤児は今一戦争と「戦後責任」を問い直す— 浅野慎一／日韓条約から50年—「解決済み」論を批判する 太田修／「ピースおおさか」問題について、教員としての経験から 増井茂美／戦後70年を最近の出版物から考える 兵藤宏

解放の視点 犬死にという事実を直視すること 石元清英
このごろ思うこと 韓国時代劇にはまっています!! 朝治武

皮革の社会史 最終回 プロフェッショナリズムへの回帰をめざして 西村祐子

なかのもん食がたり 8 生センマイ

本の紹介 加藤直樹著 『九月、東京の路上で 1923年関東大震災 ジェノサイドの残響』 橋田圭代

おじさん読書ノート 6 小熊英二著『生きて帰ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後』 平野義昌

古本屋えほんにつき 6 ヘレン・バンナーマン著「ちびくろサンボ」

部落解放 715 (解放出版社刊, 2015. 10) : 600円

特集 長野から差別問題を考える

同和教育っておもしろいんですよ 長野県同和教育の再出発 星沢重幸, 蕨澤久人, 島田一生, 日野勝／差別戒名と「命のリレー」 長野県、望月での取り組み／大江磯吉から何を学ぶのか 湯澤正農夫／「戦争遺跡・松代大本営」象山壕は、何を問いかけるのか 原山茂夫

ヘイト・スピーチを受けない権利 4 朝鮮人に対するヘイト・スピーチ小史 1 前田朗

単身高齢化が進むあいりん地区の福祉 3 西成特区構想の成果と課題 白波瀬達也

回顧 教科書無償運動 11 交錯するさまざまな人びとの思い 村越良子, 吉田文茂

部落解放 716 (解放出版社刊, 2015. 10) : 1,000円

特集 解放教育 被差別マイノリティの子どもたち 2

部落解放 717 (解放出版社刊, 2015. 11) : 600円

特集 マイナンバー制度を問う

ヘイト・スピーチを受けない権利 5 朝鮮人に対するヘイト・スピーチ小史 2 前田朗

本の紹介

八木晃介著『親鸞 往還廻向論の社会学』／矢野宏・大前治著『大阪空襲訴訟は何を残したのか—伝えたい、次世代に』／平井玄著『ぐにゃり東京—アンダークラスの漂流地図』／竹峰誠一郎著『マーシャル諸島 終わりなき核被害を生きる』／岩本孝樹著『一人ひとりの人権をまもる「いのち」の保育』／井上寿美・笹倉千佳弘編著『子どもを育てない親、親が育てない子ども—妊婦健診を受けなかった母親と子どもへの支援』

回顧 教科書無償運動 12 憲法第26条の解釈をめぐる 村越良子, 吉田文茂

部落解放 718 (解放出版社刊, 2015. 12) : 600円

特集 沖浦和光の世界

沖浦和光さんの部落史研究および被差別民衆史研究 被差別民衆の歴史をアジア的視座・全時代的視点から探究 寺木伸明／人類史的視野から現代を考え続けた偉大なフィールドワーカー 川上隆志／「オキウラ・ワールド」の妙味 千本健一郎／五十年余の同志の死を悼む 小寺山康雄／沖浦先生のマルクス主義研究と教わったこと 笠松明広

本の紹介 黒坂愛衣著『ハンセン病家族たちの物語』 江嶋修作

リバティおおさかの存続に向けた裁判に支援を!! 石橋武

「蛇たちの家」探訪記 作家・川元祥一の原点(下) 河村義人

回顧 教科書無償運動 13 終結へ 村越良子, 吉田文茂

部落解放 719 (解放出版社刊, 2016. 1) : 600円

特集 道徳教育と人権教育

本の紹介 友永健三著『部落解放を考える—差別の現在と解放への探求』 武者小路公秀

回顧 教科書無償運動 14 運動の総括 村越良子, 吉田文茂

部落解放研究 203 (部落解放・人権研究所刊, 2015. 10) : 2,000円

特集 同和地区を中心とした相談支援と包摂型社会創出の可能性

序「同和地区を中心とした相談支援と包摂型社会創出の可能性」を組むにあたって 福原宏幸／データにみる被差別部落における生活実態の変化—大阪2000年/2011年

- 月刊地域と人権 379 (全国地域人権運動総連合刊, 2015. 11)
「同和問題」 質疑を封殺した那珂川町と議会 植山光朗
- 月刊地域と人権 380 (全国地域人権運動総連合刊, 2015. 12)
鼎談 ヘイトスピーチをどう考えるか 奥山峰夫, 碓井敏正, 新井直樹
- 地域と人権京都 702 (京都地域人権運動連合会刊, 2015. 10. 1) : 150円
竹田・深草地区の改良住宅(市営住宅)のあり方を問う
1 中川正照
- 地域と人権京都 703 (京都地域人権運動連合会刊, 2015. 10. 15) : 150円
竹田・深草地区の改良住宅(市営住宅)のあり方を問う
2 中川正照
- 地域と人権京都 704 (京都地域人権運動連合会刊, 2015. 11. 1) : 150円
竹田・深草地区の改良住宅(市営住宅)のあり方を問う
3 中川正照
- 地域と人権京都 705 (京都地域人権運動連合会刊, 2015. 11. 15) : 150円
竹田・深草地区の改良住宅(市営住宅)のあり方を問う
4 中川正照
- 地域と人権京都 706 (京都地域人権運動連合会刊, 2015. 12. 1) : 150円
竹田・深草地区の改良住宅(市営住宅)のあり方を問う
5 中川正照
- 地域と人権京都 707 (京都地域人権運動連合会刊, 2015. 12. 15) : 150円
竹田・深草地区の改良住宅(市営住宅)のあり方を問う
6 中川正照
- であい 642 (全国人権教育研究協議会刊, 2015. 9) : 160円
人権のまちをゆく 71 四国中央市「土居」フィールドワーク
人権文化を拓く 214 植民地という言葉 赤坂憲雄
- であい 643 (全国人権教育研究協議会刊, 2015. 10. 25) : 160円
人権のまちをゆく 72 京都東九条 被差別の暮らしと歴史、そこからみえるもの
人権文化を拓く 215 戦後70年の退行と目覚め—東アジアの国家と市民 丁章
- であい 644 (全国人権教育研究協議会刊, 2015. 11) : 160円
人権文化を拓く 216 キリシタンと被差別民 北口学
- であい 645 (全国人権教育研究協議会刊, 2015. 12) : 160円
人権文化を拓く 217 教師、若者たちに今、伝えたいこと 佐藤真由美
- 日本史研究 637号 (日本史研究会刊, 2015. 9) : 750円
書評 杉本弘幸著『近代日本の都市社会政策とマイノリティー—歴史都市の社会史—』 高野昭雄
- はらっぱ 368 (子ども情報研究センター刊, 2015. 12)
子どもの権利条約—関西フォーラム発— 部落の子どもたちをとりまく状況 大和共平
- ヒューマンライツ 331 (部落解放・人権研究所刊, 2015. 10) : 500円
特集 外国人労働者の人権
被差別部落の歴史 近現代編 10 「市民」をつくる／「市民」になる 黒川みどり
書評 奥田均著『「同対審」答申を読む』 谷川雅彦
- ヒューマンライツ 332 (部落解放・人権研究所刊, 2015. 11) : 540円
特集 自己処方としての依存を考える—一度でもやり直せる社会へ
各地の人権研究所の取り組み 8 人権課題を身近なものに 一般社団法人ひょうご部落解放・人権研究所 高吉美
被差別部落の歴史 近現代編 11 「市民社会」への包摂と排除 黒川みどり
- ヒューマンライツ 333 (部落解放・人権研究所刊, 2015. 12) : 540円
特集 差別禁止法の制定を求めて
被差別部落の歴史 近現代編 12 部落問題の<いま>を見つめて 黒川みどり
書評 友永健三著『部落解放を考える—差別の現在と解放への探求』 谷元昭信
- ヒューマンJournal 214号 (自由同和会中央本部刊, 2015. 9) : 500円
部落解放運動40年を振り返って 17 ちびくろサンボ問題 灘本昌久

1928年、昭和天皇の即位の「大典」に見る朝鮮人の利用と排除—朝鮮人土木労働者の動きを中心に— 塚崎昌之

渡航阻止制度から地元論止制度へ—1920年代後半の渡航管理政策 福井謙

強制送還をめぐる李承晩政権の在日コリアン政策—1948年から1953年を中心に— 関智焄

東アジアの冷戦と日韓会談反対運動—1950年代を中心に— 金鉉洙

1950年代前半における在日朝鮮人生活保護受給者の急増とその背景—在日朝鮮統一民主戦線の「生保闘争」を中心に— 金耿昊

故郷としての朝鮮学校—朝鮮学校の音楽教育に関する— 考察 金理花

「在日企業」の日本への貢献—安楽亭（株）を事例に— 李光宰

ヨンヒル・カン『イースト・ゴーズ・ウェスト』における科学的管理法—日米による朝鮮人労働者の構築— デヴィッド・S・ロウ／宋恵媛訳

社会科学 107（同志社大学人文科学研究所刊，2015.11）
戦後、集団移住へ向けた河川敷居住者の連帯—広島・太田川放水路沿いの在日朝鮮人集住地区を事例に— 本岡拓哉

人権と部落問題 877（部落問題研究所刊，2015.10）：600円

特集 地域と人権

部落（同和地区）名を公表することは「部落差別」なのか 奥山峰夫

「部落」の呼称について—「被差別部落」は戦時体制下の造語 成澤榮壽

文芸の散歩道 「蓮華草」—新発見の明治期部落問題小説 秦重雄

人権と部落問題 878（部落問題研究所刊，2015.11）：600円

特集 言論・表現の自由と「差別表現」問題

言論・表現の自由と今日の政治状況 橋本進／部落解放同盟の「糾弾」と仏教界の対応 日隈威徳／「同和問題」

質疑を封殺した那珂川町と議会 植山光朗／演劇界における不当な「差別発言」問題について 神崎務／部落問題に見る表現の自由と「差別表現」問題 上 成澤榮壽

「ヘイトスピーチ」の法的規制を考える 奥山峰夫
資料室だより 三好文庫—三好伊平次の図書・資料群
文芸の散歩道 近世随筆に著された賤民たち—『椎の実筆』より— 小原亨

人権と部落問題 879（部落問題研究所刊，2015.12）：600円

特集 小中一貫校、何が問題か

部落問題に見る表現の自由と「差別表現」問題 下 成澤榮壽

文芸の散歩道 島崎藤村の談話「融和問題と文芸」について 川端俊英

人権と部落問題 880（部落問題研究所刊，2016.1）：600円

特集 戦後部落問題の分岐点 1

戦後部落問題における教育の位置 東上高志／今に生きる文化厚生会館事件の教訓 佐藤匡子／八鹿高校事件と私—あの日とあの頃— 前川貫治／私の八鹿高校事件 三木美保／私の11.22八鹿高校事件 谷垣真也／彼にとっての文化厚生会館・八鹿高校両事件 成澤榮壽

本棚 秦重雄・家永知史・岩井忠熊（インタビュー）
『「永遠の0」を検証する—ただ感涙するだけでいいのか』 三上聡太

文芸の散歩道 夏目漱石が見たロンドンの巡査と日本の巡査 水川隆夫

振興会通信 124号（同和教育振興会刊，2015.9）

御同朋の教学 57 第一連区布教使研修会差別発言事件から 3 麻田秀潤

同朋運動史の窓 30 左右田昌幸

信州農村開発史研究所報 133（信州農村開発史研究所刊，2015.9）

差別からの「暇乞い状」 斎藤洋一

じんけん ぶんか まちづくり 49号（とよなか人権文化まちづくり協会刊，2015.10）

パネル展「同対審答申から50年、部落問題は今…」をとりくんで 佐佐木寛治

月刊地域と人権 378（全国地域人権運動総連合刊，2015.10）

在日社会の分断の中で 呉文子

身分制・部落問題の教科書記述と学習のすすめ方 最終回 小牧薫

15. 11)
「同和対策審議会」答申 50年を迎えた今日の部落 4
解放新聞改進黨 471号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2015. 12. 12)
「部落地名総鑑」発覚から40年 1
解放新聞京都版 1037号 (解放新聞社刊, 2015. 12. 1) : 70円
丘地区を訪ねて
解放新聞滋賀版 2148号 (部落解放同盟滋賀県連合会刊, 2015. 12. 21)
「あすばる甲賀」の存続を求める市民活動に協働を!!
解放新聞広島県版 2187号 (解放新聞社広島支局刊, 2015. 10. 25)
昭和史の中のある半生 35 小森龍邦
解放新聞広島県版 2192号 (解放新聞社広島支局刊, 2015. 12. 15)
昭和史の中のある半生 36 小森龍邦
語る・かたる・トーク 247 (横浜国際人権センター刊, 2015. 9) : 500円
シリーズ「解放教育」継承への扉 44 学力格差の背景にあったもの 2—乗り越える道すじ 外川正明
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う この一年、終わった!?! 吉成タダシ
語る・かたる・トーク 248 (横浜国際人権センター刊, 2015. 10) : 500円
シリーズ「解放教育」継承への扉 45 学力格差の背景にあったもの 3—問題の所在を改めて考える 外川正明
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う ストーリーに終わりなし 吉成タダシ
語る・かたる・トーク 249 (横浜国際人権センター刊, 2015. 11) : 550円
シリーズ「解放教育」継承への扉 46 格差を乗り越えるための家庭学習 1—全国学力学習状況調査から 外川正明
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う いるのにいない存在 吉成タダシ
語る・かたる・トーク 250 (横浜国際人権センター刊, 2015. 12) : 550円
シリーズ「解放教育」継承への扉 47 格差を乗り越えるための家庭学習 2—家庭に条件はあるのか 外川正明
- 語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 事実は小説より奇なり 吉成タダシ
かわとはきもの 173 (東京都立皮革技術センター台東支部刊, 2015. 10)
靴の歴史散歩 118 稲川實
皮革関連統計資料
関西大学人権問題研究室紀要 70号 (関西大学人権問題研究室刊, 2015. 9)
「男尊女卑」考—近代日本における「男尊女卑」について— 源淳子
エンパワメントの〈社会性〉をめぐって 姜博久
京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信 15号 (京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊, 2015. 9)
沖縄芝居「いのちの簪」を観て 前川修
京都部落問題研究資料センター通信 41号 (京都部落問題研究資料センター刊, 2015. 10)
本の紹介 李興燮・室田卓雄編 『続 アボジがこえた海在日朝鮮人一世の戦後』 金森襄作
収集逐次刊行物目次 (2015年7月~9月受入)
キリスト教社会問題研究 64 (同志社大学人文科学研究会刊, 2015. 12)
賀川豊彦と同志社大学 李善恵
クロノス 37 (京都橘大学女性歴史文化研究所刊, 2015. 11)
特集 女たちの移動と越境
イギリス女性生活誌 37 前世紀転換期の労働者教育運動—アリス・フォリーの事例から— 1 松浦京子
衛生と衛生観念の歴史的研究 4 明治後期・大正期の村役場の衛生行政—滋賀県蒲生郡安土村を対象にして— 高久嶺之介
グローブ 83 (世界人権問題研究センター刊, 2015. 10)
生活困窮者自立支援法がスタートしました 矢野亮
人権・同和教育のいま—マイノリティのエンパワメントへの思い 阿久澤麻理子
国際人権ひろば 124 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2015. 11)
特集 3. 11から4年—復興が不可視化するもの
在日朝鮮人史研究 45 (在日朝鮮人運動史研究会編, 2015. 10) : 2,400円

継続する植民地主義—植民地統治政策と戦後の外国人政策を貫く差別思考 戴エイカ

極右組織 British Nitional Party の人種差別言説の変化—生物学的人種差別主義の放棄と文化的人種差別主義に対する信奉 竹岡陽一

女性と犯罪をめぐる言説—「騎士道精神」から「女性の社会進出」へ 狩谷あゆみ

サンフランシスコの変容するLGBTコミュニティ 河口和也

ソロクトと定着村—韓国・ハンセン病問題訪問記 黒坂愛衣

反復するカラス 郭基煥

書評

森山至貴著『「ゲイコミュニティ」の社会学』前川直哉／知念ウシ・興儀秀武・後田多敦・桃原一彦著『闘争する境界 復帰後世代の沖縄からの報告』ましこひでのり

解放社会学研究 28 (日本解放社会学会刊, 2015. 3) : 2,000円

「学校でウンコをしたくなるたびに考えること」—合理的配慮を求める争いとつまずき 青木千帆子

解放という視座を有する社会運動が社会に与える影響—「精神病」者解放・赤堀闘争の分析を通じて 桐原尚之
イギリスのマスメディアにおける東欧人差別言説—犯罪予備軍および犯罪人として表象される東欧人移民 竹岡陽一

奇妙な「連帯」—問われずにいるものは何か 高橋哲哉

小特集 不安定就労の拡大と下層の再編

排除装置としての職人カテゴリー—住宅資本・パワービルダーに従事する個人請負・大工職人の事例から 山根清宏／脆弱で、不安定で、曖昧な連帯の可能性—ある女性コミュニティ・ユニオンを事例として 仁井田典子
書評 金澤貴之著『手話の社会学—教育現場への手話導入における当事者性をめぐって』佐藤貴宣

HISTORICAL OVERVIEW OF THE STUDY OF DISCRIMINATED MINORITIES IN JAPAN FUKUOKA Yasunori

解放新聞 2731号 (解放新聞社刊, 2015. 9. 21) : 90円
リパティおおさかが存亡危機に

解放新聞 2732号 (解放新聞社刊, 2015. 9. 28) : 90円
「戦争法案」の強行成立にたいする抗議声明 部落解放

同盟中央本部

ノンフィクションからの警鐘 11 『もじれる社会』本田由紀著 「戦後モデル」をどうこえるか 音谷健郎

ぶらくを読む 98 部落の近現代通史の展望 黒川みどりの通史的試みを評す 湧水野亮輔

解放新聞 2733号 (解放新聞社刊, 2015. 10. 5) : 90円
ユネスコ世界記憶遺産登録へのコメント

追悼 沖浦和光先生との出会い 笠松明広

今週の1冊 西谷修著『夜の鼓動にふれる 戦争論講義』

解放新聞 2734号 (解放新聞社刊, 2015. 10. 12) : 90円
今週の1冊 畑中章宏著『『日本残酷物語』を読む』

解放新聞 2735号 (解放新聞社刊, 2015. 10. 19) : 90円
今週の1冊 小林敏明著『廣松渉 近代の超克』

解放新聞 2738号 (解放新聞社刊, 2015. 11. 9) : 90円
ノンフィクションからの警鐘 12 大島堅一著『原発のコスト』音谷健郎

解放新聞 2740号 (解放新聞社刊, 2015. 11. 23) : 90円
ノンフィクションからの警鐘 13 藤田孝典著『下流老人』音谷健郎

ぶらくを読む 99 被差別民「当事者主義」を通史に貫く意味とは何か 湧水野亮輔

解放新聞 2742号 (解放新聞社刊, 2015. 12. 14) : 90円
今週の1冊 河出書房新社編集部編『戦争はどのように語られてきたか』

解放新聞 2744号 (解放新聞社刊, 2015. 12. 28) : 90円
年末・年始おすすめの本

田崎健太著『真説・長州力 1951-2015』／山本作兵衛著『画文集 炭鉱に生きる 地の底の人生記録』／牧野雅彦著『精読 アレント『全体主義の起源』』

解放新聞大阪版 2048号 (解放新聞社大阪支局刊, 2016. 1. 5)

西成で民設民営の隣保館 「スマイルゆ〜とあい」がオープン

解放新聞改進黨 468号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2015. 9)

「同和対策審議会」答申 50年を迎えた今日の部落 2

解放新聞改進黨 469号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2015. 10)

「同和対策審議会」答申 50年を迎えた今日の部落 3

解放新聞改進黨 470号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 20

収集逐次刊行物目次 (2015年10月～12月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

愛生 797号 (長島愛生園長濤会刊, 2015. 10)

映画「あん」を見て 尾崎元昭

明日を拓く 108 (東日本部落解放研究所刊, 2015. 2) :
1,080円

特集 沖縄の構造的差別と辺野古問題

明日を拓く 109・110 (東日本部落解放研究所刊, 2015. 3) : 2,160円

特集 皮革の町の子どもたち—木下川解放子ども会の35年の歩み—

明日を拓く 111 (東日本部落解放研究所刊, 2015. 7) :
1,080円

特集 人権教育

座談会 信州発! そのあとに続く全ての世代のために—
全人教長野大会の成功に向けて—/自分の部落と出会い
直し、大切なものを伝えたい 海野敦彦

東日本部落解放研究所第30回総会記念講演 人間が差別・
抑圧から自由になるということ—グローバルな格差社会
のなかで増幅される被抑圧者、とりわけ被差別マイノリ
ティの身体的・精神的記憶について— 楠原彰

IMADR通信 184 (反差別国際運動日本委員会刊, 2015. 11) : 500円

特集 働く場で求められる人としての尊厳

ウイングスきょうと 130 (京都市男女共同参画推進協
会刊, 2015. 10)

図書情報室新刊案内

牟田和江編『改訂版 ジェンダー・スタディーズ 女性学・
男性学を学ぶ』/ろくでなし子著『私の体がワイセツ?!

女の子のそこだけなゼタブー』

ウイングスきょうと 131 (京都市男女共同参画推進協
会刊, 2015. 12)

図書情報室新刊案内

柳沢正和, 村木真紀, 後藤純一著『職場のLGBT読本—
「ありのままの自分」で働ける環境を目指して—』/小
山朝子著『ワーク介護バランス』

解放社会学研究 26 (日本解放社会学会刊, 2013. 3) :
2,000円

黙して語らぬひとが語り始めるとき—ハンセン病問題聞
き取りから 黒坂愛衣

特集 労働力の再編と排除

建築業から風俗営業へ—沖縄のある若者の生活史とく地
元>つながり 打越正行/温泉観光地における旅館・ホ
テルの労働力再編—グローバル化とサバイバル・サーキッ
トの形成過程 山口恵子/個人化に抗する労働運動—コ
ミュニティ・ユニオンの事例から 文貞實

書評

前川直哉著『男の絆—明治の学生からボーイズ・ラブま
で』(筑摩書房, 2011年) 北川由紀彦/山田富秋著
『フィールドワークのアポリア—エスノメソドロジーと
ライフストーリー』(せりか書房, 2011年) 狩谷あゆ
み/話者 有村敏春, 編者 福岡安則・黒坂愛衣『生き抜
いて サイパン玉砕戦とハンセン病』(創土社, 2011年)
三浦耕吉郎

解放社会学研究 27 (日本解放社会学会刊, 2014. 2) :
2,000円

事務局よりお知らせ

◇2015年度部落史連続講座が全6回、無事に終了しました。講演録を3月末に発行する予定です。ご希望の方はご連絡ください。

◇次年度も春・秋に三回ずつ開催を予定しています。詳しくは次号でお知らせします。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp/>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分